

浜

田山駅を降りて地上に出ると、目の前に店が見える。

駅前道の幅が広い商店街によく馴染んでいて、開け放たれた入り口からは本がみっちり詰まった店内がよく見える。店内の壁はすべて天井までの棚で埋まり、中央部は左に雑誌の島、右に文庫の島。壁沿いの棚の上部には、1から35まで分けられて「海外文学に親しむ棚」「社会人力をUPさせる棚」などとイラスト付きの分類札が付いている。この手づくり感がいい。この店の真骨頂は、レジ前のフェアの場所。1〜2カ月ごとに企画を立てて売り場をつくっている。羽鳥書店や夏葉社などの本を集めた「小さい出版社フェア」、出版社の特定シリーズを集めたフェアなどだ。平成19年「ちくま学芸文庫フェア」では、2カ月で457冊を売り上げた。同21年「晶文社品切れ本フェア」では、370冊仕入れて240冊を売った。みずず書房や作品社など、小規模でも良書を世に出し続けている出版社のフェアは人気だという。「出版社からの提案ではなく、自分で考えた、うちの店なりの企画を考えたい。どこもやっていないような新しいネタ探したいへんなんです」と店長の木村晃さんは話す。レジ横の「売れてほしい本」も店長渾身の棚だ。取次に頼らず、週一回自ら神保町に仕入れに行っている。店を訪れる人が減っているのは否めないが、こうした骨太のフェアや棚には根強い人気がある。「そうしたお客さんが飽きないように、日々棚を触っています。やはり新鮮さが気になりますから」。

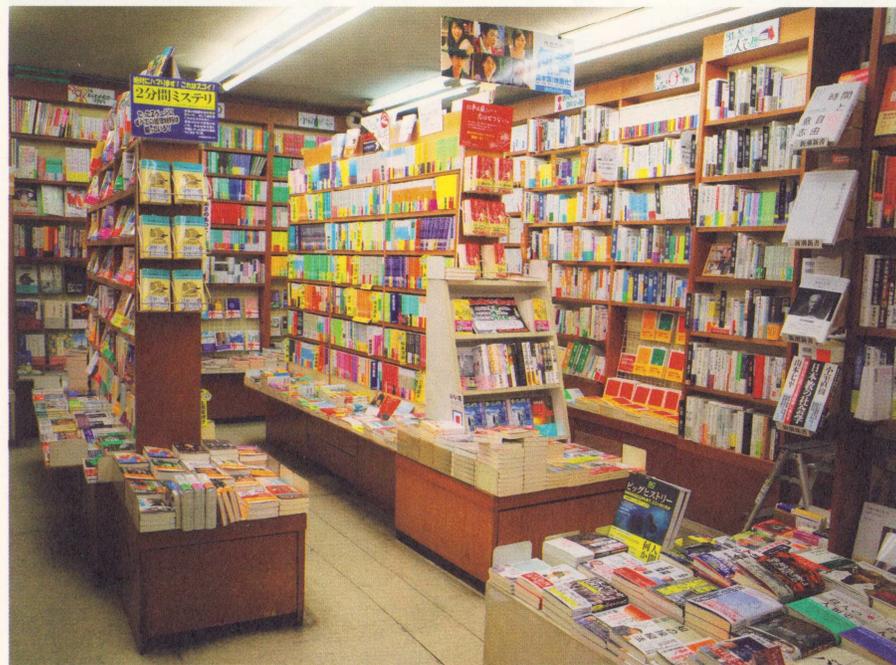
個性派新刊書店さんぽ

駅前に構える浜田山の良心

サンブックス浜田山

[浜田山]

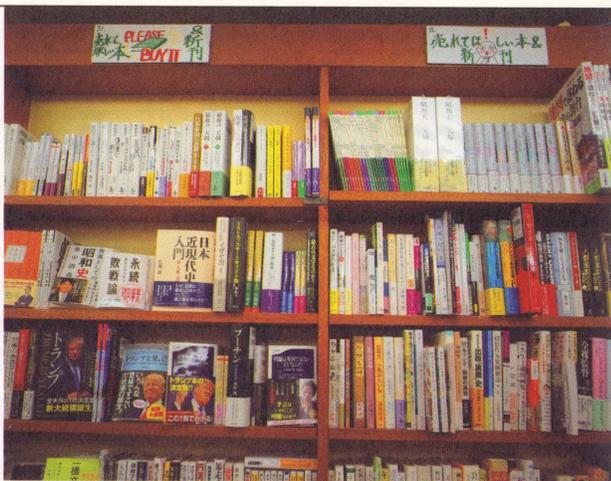
棚の前を通ったら、妙に見つめられたポップ、イラストと少ない言葉で効果絶大。



派手さはないが、しみじみと美しい。街の本屋さんのお見本のような眺めだ。

冊を売り上げた。同21年「晶文社品切れ本フェア」では、370冊仕入れて240冊を売った。みずず書房や作品社など、小規模でも良書を世に出し続けている出版社のフェアは人気だという。「出版社からの提案ではなく、自分で考えた、うちの店なりの企画を考えたい。どこもやっていないような新しいネタ探したいへんなんです」と店長の木村晃さんは話す。レジ横の「売れてほしい本」も店長渾身の棚だ。取次に頼らず、週一回自ら神保町に仕入れに行っている。店を訪れる人が減っているのは否めないが、こうした骨太のフェアや棚には根強い人気がある。「そうしたお客さんが飽きないように、日々棚を触っています。やはり新鮮さが気になりますから」。

ここが地元でなくとも、どこかなく「帰ってきたな」と思わせる安心感がある。



店の顔「売れてほしい本」。判型も出版社も入り乱れて並ぶ様子が熱い。PLEASE BUY!!

雑誌売り場奥のスペースも活用。イラストもいい味を出している。



1から35まで、すべての分類札にイラストが付いている。その細かさに感服。



INFO

京王井の頭線浜田山駅徒歩1分。10時～22時(日・祝は11時～21時)、無休。杉並区浜田山3-30-5 ☎03-3329-6156

